

玉

地獄に なしい

からの
報告
加藤博

晩聲社

＊ロケット、ロケット
軍曹がバズーカ砲手を小声で呼ぶ。
兵士たちは小隊長の作戦指令を待って、小隊編成で
つきまとい暗闇の中に消えていく。また月が出てくる。
七時四〇分、最初のバズーカ砲が政府軍の……



著者■かとう・ひろし■

1944年福島県生まれ。立教大学文学部卒。

1971年からインドシナ、A S E A N諸国を取材。

フォト・ジャーナリスト。写真家協会会員。

写真集に『KAWTHOOLEI 地図にない国』

(同時代社刊)がある。

「地図にない国」からの報告

定価=1800円

1982年9月1日 初版第1刷

著 者 加 藤 博

装 幀 杉浦康平+鈴木一誌

発行者 和多田 進

発行所 株式会社 晩聲社

〒101 東京都千代田区神田駿河台3-2 山崎ビル

電話 (03) 255-4014/0030

振替 東京6-50696

印刷 福音印刷株式会社

製本 ナショナル製本

用紙 共和洋紙店

©Kato H.
Printed in Japan

乱丁落丁はお取り替えいたします。

「地図にない国」からの報告 目次

第一章 「地図にない国」からの手紙……………9

ボ・ミヤ議長からの手紙 10

世界の眼はふたたびインドシナに注がれた 11

国境の町メソットへ 13

コートルレイ行き 16

コートルレイホワイトハウス 20

ボ・ミヤ議長へのインタビュー 20

カレン族の最終目標 23

黄金の三角地帯と麻薬の政治学 27

ビルマの隣国タイ 29

コートルレイとの出会い 31

クン・イエノン少佐へのインタビュー 32

第二章 ジェノサイド作戦……………37

西と東でビルマ難民が急増 38

「キング・ドラゴン作戦」 38

アラカン州の歴史 42

「ビヤ・リ・ビヤ作戦」によって作られた「戦略村」 44

「戦略村」のもつ意味 47

ビルマ政府による民族皆殺し政策の歴史 ㊦

第三章 カレン族の歴史……………53

モイ川をのぼってメトウリへ ㊦

ロンジーとはいわない、テクーだ ㊦

幻のコートレーイ放送 ㊦

俺はカレン人だ ㊦

三度目には警告なしに殺す ㊦

カレン族の新しい実験 ㊦

女性に革命運動に参加すべきか？ ㊦

「熱砂の河」を渡ってきた ㊦

カレン文字 ㊦

迫害の歴史 ㊦

カレン民族同盟の誕生 ㊦

武装蜂起——インセエインの戦闘 ㊦

第四章 『リリー・マルレーン』の歌声……………85

兵士たちの日課 ㊦

加害者としての日本人 ㊦

『リリー・マルレーン』の歌声が聞こえる 92

カレン・ドーン 95

“魚が魚を喰う、蛙が蛙を喰う” 98

第五章 前線への道……………103

日本語を話すヒゲの中佐 104

前線への道 108

アルコール好きの中佐 112

略奪のかぎりをつくす政府軍 114

政府軍を脱走してKNLAへ 125

第六章 戦場での体験……………129

夜明け前の出発 130

戦闘開始 134

一〇〇メートル先で砲弾が炸裂 138

戦闘再開 139

降伏しろ、仲間は全滅した 141

「キンニー・エント・ン作戦」 146

KNLAの「ヒット・エント・ラン作戦」 148

作戦の総括 151

「大ビルマ族主義」と分裂支配の法則 154

第七章 密貿易という名の国境貿易…………… 157

ビルマの闇市経済を支える国境貿易 158

国境貿易基地 160

ラジカセからサファイアまで 163

麻薬の運び屋の通行を禁止する 165

宝くじ 167

メ・ボからチェトキへ 169

自動車道路建設 171

第八章 ビルマ連邦社会主義共和国…………… 175

ラングーンの窮乏生活 176

公務員の汚職とダフ屋の横行 179

諜報制度とビルマの「虎の檻」 181

ネ・ウイン政権下の「言論の自由」 183

解放区にこそ自由がある 184

ネ・ウイン政権を脅かす三つの勢力 188

戦意を失った政府軍兵士 194

ネ・ウィーン大統領暗殺未遂事件 196

ビルマ民衆の離反 197

第九章 民族独立への道……………203

「独立宣言」の起草 204

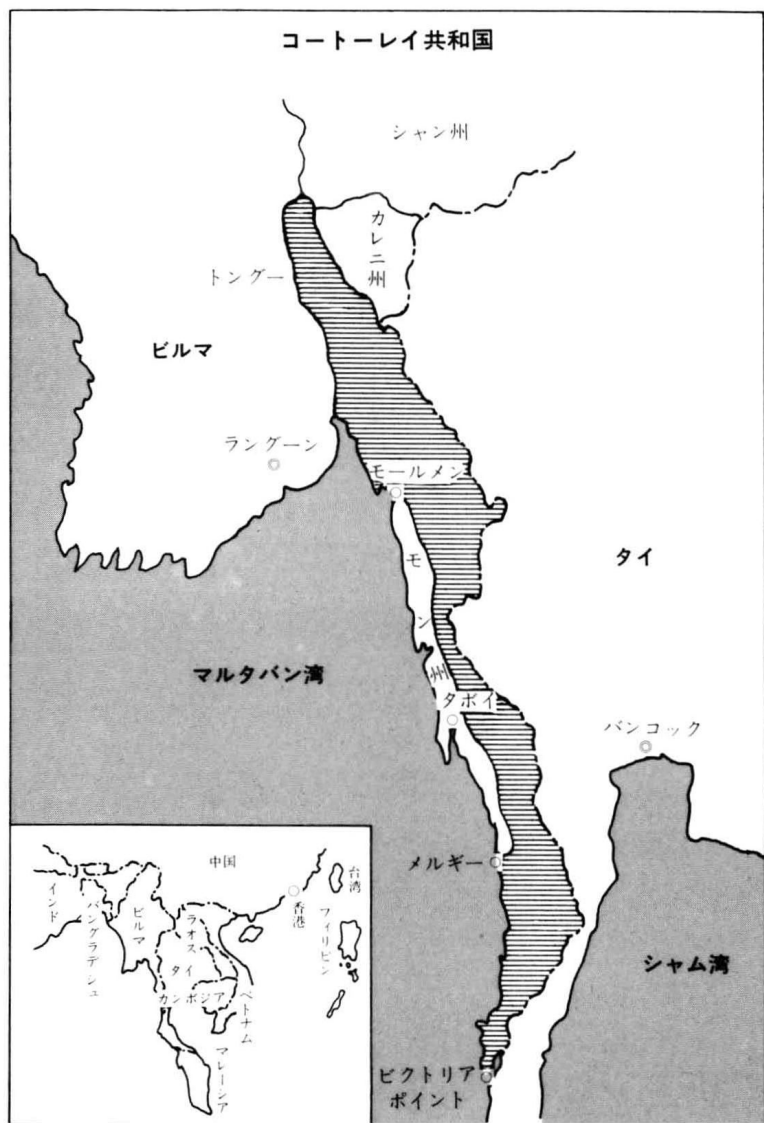
民族民主戦線の発展をめざして 208

工作班は山を越え川を渡る 209

国際的な認知を求めて 213

あとがき 217

「地図にない国」からの報告



第一章 「地図にない国」からの手紙

あなたが再度コートレーを訪れる希望のあることを知って、私はたいへん満足しています。あなたがいつでも私を訪れ、取材するのを歓迎します。あなたのイニシアチブでいつくるのか決めてください。私は心からあなたを招待します。

一九七八年九月二九日

カレン民族同盟議長ボ・ミヤ

一九七八年、私はボ・ミヤ議長から一通の手紙を受けとった。この手紙が届くまでずいぶん時間がかかっていた。九月二九日付の手紙が私の手もとに届いたのは一〇月三〇日。私がコートレーに行くのにはさらに三カ月かかった。

タイの五バーツ切手がはられた外国郵便は、差出人が記されていないかった。一瞬、だれからの手紙かと考えた。それもそのはず、私が、カレン民族同盟議長ボ・ミヤ氏宛の手紙を人に託してタイの連絡員に届けてもらったのは八月だった。それから三カ月、何の音沙汰もなかった。連絡員から第七旅団軍管区、そして総司令部へと渡り、ボ・ミヤ議長に届くまで時間がかかることはわかっていた。それにしても、三カ月もすぎしており、返事がくることはあり得ないだろうと思っ

ていたときだったので、突然、幸運が舞いこんできたような気分だった。数行の手紙を何度も読みかえし、ボ・ミヤ議長のサインをくり返しながめた。

急いでコートレーイに行こう。仲間のカメラマン、友人、先輩の間を走りまわって金策にとりかかった。私の銀行口座は底をついていたので今回はなんの助けにもならない。やっと一月の末に金策のメドがつき、あわただしく出発の準備にとりかかった。まず、ボ・ミヤ議長宛に手紙を書かなければならない。手紙を受けとってから三カ月近くも返事を出していなかった。もどかくタイプライターのキーをたたき、デイスカウントの航空券を手配した。コダックのトライXをパトローネにつめかえる作業など、出発前にしなければならぬことが山積みになっていた。トライXの一〇〇フィート缶五本分のフィルム、コダックのカラーフィルムKR64を五〇本準備した。

●世界の眼はふたたびインドシナに注がれた●

私の乗った飛行機がバンコックに向かって飛んでいるとき、中国とベトナムの間で第一次越戦争がはじまった。深夜にドン・ムアン、タイ国際空港に着いてホテルに直行した。ホテルに着いても気づかなかったが、翌日の『バンコックポスト』を見て仰天した。一面全ページをつかって中国軍の越境攻撃とベトナム軍の配置図を紹介していた。ふたたびインドシナが戦場となった。カンボジアで波尔・ポト政権が権力の座を失い、あらたにヘン・サムリン議長のカンプチア民

族愛国戦線が権力を握った。このころから中国―ベトナム国境周辺の動きがあらわだしくなった。一九七九年一月末から二月のはじめにかけて、中国がベトナムに懲罰を加えるという話が出ていた。一月に中国とアメリカが正式に外交関係を樹立、鄧小平副首相がアメリカを訪問中に副首相自身の口から記者団に語られていたからだ。これに即応するかのように、中国軍は国境に戦車、ミグ戦闘機、兵員を配置しはじめた。

一方ベトナムは、ベトナム共産党機関紙『ニャンザン』を通じて、「首都ハノイの防衛は万全である」との記事を掲載する。VNA（ベトナム通信）は『ニャンザン』の記事を伝えた。日本のテレビもこのニュースをくり返し伝え、中国、ベトナムに近く戦争が起る可能性をおわせていた。中越戦争がはじまるかもしれない。各新聞社はバンコック駐在の支局の増援態勢をとり、ヘン・サムリン軍とボル・ポト軍のカンボジア内戦、難民の流出を合わせて報道するなど、あわただしい動きをしめしている。一九七五年五月、ベトナムが完全解放され、ラオス、カンボジアと合わせてインドシナ全域における三〇年ごしの戦争が終わって、ようやく平和がやってくるとだれもが信じた。しかしそれからわずか三年のうちに、サイゴンで企業や流通の国有化政策が実施されると華僑の流出がはじまり、カンボジア、ベトナムの国境紛争が起った。中越関係はにわかにあやしくなってきた。タイはカンボジアが隣り合わせであるだけに影響も大きい。ヘン・サムリン軍とベトナム軍の攻撃を受けて敗走するボル・ポト軍がタイ領に逃げこんでくる。難民もまた大量に流入してくる。タイ政府の態度が注目されていた。世界の眼はふたたび中国、イン

ドシナに注がれはじめた。

●国境の町メソットへ●

乾季の真ただ中のタイの首都、バンコック。積乱雲が空いっぱいひろがる。真冬の日本から真夏のバンコックへ。皮膚の毛穴が懸命に広がっている感じだ。汗が吹き出してくる。スリ・アユタヤロードには、一〇年前まで東京で走っていたボンコツの日本車が、タクシーとして、堂々と走っている。どのタクシーも例外なくドアの把手がなかったり、スピードメーターが動かなかったり、燃量計が壊れていたりして、満足な車はほとんどない。真っ黒な排気ガスをまき散らして走っている。バスやトラック、タクシー、乗用車までが交通ルールを無視して、車の少ない車線に乗り入れる。交通の混雑はこれで一層激しくなる。先を急ぐ車がひしめきあっている。けたたましいクラクションの音や排気ガス、それに交通ルールの無視は渋滞を生み、喧噪の度は増すばかりだ。めざす目的地がすぐそこにあるのにいっこうに車が進まない。いつものことながらバンコックの交通事情には悩まされる。

メソット行き夜行バスの座席券発売所はスリ・アユタヤロードのニューアマリンホテルの近くにある。座席券の発売所は各地方ごとにカウンターが設けられていた。それぞれの目的地への座席を求める人びとで混雑していた。メソット行きの夜行バスはまだ席にゆとりがあった。座席はF4の窓側だった。

ビルマにあるカレン民族解放軍の解放区、コートレーイに行くためには、まずタイ国境の町メソットに行かなければならない。そして早く連絡員とコンタクトを取るからだ。

冷房設備が完備された夜行バスは、冷房をきかせられるだけきかせて走る。外は三〇度くらいの温度にちがいないのに。これがタイ式のサービスなのか。冷房は機構上温度のコントロールができないらしい。乗客たちは長袖の上衣を着て、タオルケットをかけて寝ている。乗客たちは中国語を話すタイ人がほとんどだが、女性もいる。外国人は私だけだった。ほとんどが黒のアタッシューケースを持っている中国系タイ人だ。国境の町で商売をする商人たちだろう。

メソットは、三〇〇キロ以上にわたるタイービルマ国境にある有力な国境貿易基地のひとつである。ビルマのネ・ウィン政権下の経済では、消費物資、日用雑貨類などほとんどがタイから流れていく。密輸という名の国境貿易が行なわれているのだ。年間の国境貿易に占めるタイ経済の比重は大きい。国境貿易ににくいタイの経済専門家の話では、タイの総輸出額の二〇パーセントが国境貿易の取引額に相当する。もちろん、これは東部カンボジア国境や南部マレーシア方面の分も含めての話だ。いずれにせよ国境貿易はタイ経済にとって不可欠の重要な存在なのだ。

バンコック発の夜行バスでメソットまで八時間、距離にして六二五キロメートル。夜行バスは国道一号線を北上してターク県の県庁所在地タークから西のビルマ国境に向かい、山をぬうように走ってメソットまで行く。かつて日本軍がビルマに侵攻するために、大変な思いをしてジャングルを切り開きながら行軍した道だ。丸山静夫氏が『大東亜戦史』の中でその大変さを報告して